

平成30年 5月19日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02298

研究課題名(和文) アダプテーションとしての歴史小説ならびに歴史のアダプテーションに関する考察

研究課題名(英文) Historical Novel as Adaptation of History

研究代表者

佐々木 徹 (Sasaki, Toru)

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：30170682

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：歴史のアダプテーションとしての歴史小説について、招待講演の研究発表を行った後、それを活字にして日本語の論文を発表した。また、継続的な研究課題であるディケンズに関しては、伝記的事実と作品の関連について、ならびに『大いなる遺産』について国際誌に論文を発表し、『荒涼館』の翻訳(全4冊)を刊行するとともに、国際学会で研究発表を行った。また、小説から映画へのアダプテーションについてアメリカの学術誌に論文を掲載した。加えて、連合王国への海外出張を利用して、ディケンズならびにアダプテーションに関して、ロンドン大学のマイケル・スレイター、フィリップ・ホーン両教授から有益なレビューを受けることができた。

研究成果の概要(英文)：I have published: a scholarly article in Japanese on the idea of the historical novel as adaptation of history; two articles on Dickens in international journals; an article on the adaptation of a novel into a film in an international journal: and have received research reviews directly from two academics in the UK on the trips made possible by this grant.

研究分野：英文学

キーワード：アダプテーション ディケンズ 歴史小説 映画

## 1. 研究開始当初の背景

本研究の基本的構想を得る契機となったのは、2013年日本ヴィクトリア朝文化学会において特別企画として行われた、同学会会長の井瀬久美恵氏との「歴史学と文学の対話」であった。これは歴史学と文学の接点として伝記を措定した対談であり、「歴史とは偉人の伝記である」と述べたカーライルや、カーライルの伝記を書いた歴史家フルード、歴史書と伝記の文体などについてこれまで持っていた漠然とした考えをまとめる好機となった。また、この対談の準備のために、伝記と同じように歴史と文学の中間に位置する歴史小説についても考察することとなった。この点において非常に有益であったのが、「スコット以後の史家、特にマコーレーは社会と個人の描き方においてスコットの大きな影響を受けた」とする“*Influence of Sir Walter Scott on History*”と題されたG. M. トレヴェリアンの論考であった。

この対談の後で、Ann Rigney, “*Adapting History to the Novel*,” *New Comparison* (1989) という論文の存在を知り、早速取り寄せて読んでみた。リグニーの定義によれば、歴史小説とは実在の事件・人物と虚構の事件・人物を混交させることによって成立するディスコースである。その際、虚構の事件はあくまでも実際にあった出来事からなる全体の枠組みの中に副次的に配置される。リグニーは *Old Mortality* を例にとり、17世紀後半におけるスコットランドの宗教的動乱の「歴史」を「小説」へと作りかえる過程において、スコットは「伝記」(ヘンリー・モートンなる個人の架空の一生)を多数の人間の関わる過去の事件の表象に転用(アダプト)した、と説明する。なるほどこのように考えるなら、研究代表者がここ数年続けてきたアダプテーション研究を進展させ、歴史小説研究と結びつけることが可能になる。

スコットは当時まださしたる文化的権威を有していなかった「小説」というジャンルを由緒正しい「歴史」と結合させ、リスペクタブルなものにした。ところが、彼の歴史小説が大評判となり広く受け入れられるようになると、逆向きのアダプテーションが生み出されることになる。スコットの独創性はそのディスコースの形態(詳細で生き生きとした語り)と扱う素材(人物の日常)にあり、これが彼の小説を当時の型にはまった歴史記述とは一線を画するものにしていった。すると今度は19世紀前半の気鋭の歴史家たちがスコットから学ぼうとしたのである。スコットの影響は大陸にも及んでおり、彼を敬愛していたフランスの歴史家オーギュスタン・ティエリーは、『ノルマン人による英国征服の歴史』序文(1825年)において、「分析的に述べるのではなく、物語的に語ることにより、個々の人間同様人間の集団にも一種の歴史的生命が付与される。そのようにして、国家

の政治的運命が、個々人の人生における日常的なディテイルが自然に喚起するところの人間の興味を帯びようになる」と宣言した。そして、マコーレーは“History”(1828年)と題されたエッセイの中で、スコットの名を挙げ、歴史小説の専門領域となってしまった感がある「人間なるものを読者に親しく知らしめる」ディテイルを歴史家は取り返す必要があると述べたのだった。

リグニーが指摘するように、スコットの工夫は「伝記」を歴史に材を求めた小説にアダプトすることにあった。だが、単に歴史的大事件の渦中に登場人物を放り込めばそれで済むというものではない。歴史家たちが羨望の眼で眺めた「生き生きとした」「人間的な」記述とは具体的にどのようなものであったのか? 本研究の一つの目的はこの点を明らかにすることである。また、本研究はこれまで継続して行ってきたディケンズとアダプテーションに関する研究の延長として構想されたものであり、もうひとつの目的は、以下に述べるように、歴史とアダプテーションの問題をディケンズを軸にして具体的に考察することである。

## 2. 研究の目的

スコットとマコーレーに関しては、*Old Mortality* と *History of England* に焦点を絞って3年間で精読作業を行い一定の結論を出す。同時に、歴史とアダプテーションについて、ディケンズを中心に据えて年度ごとに次のような範囲を設定して研究を実施する。

(1) マコーレーと同じようにカーライルも、ロックハート著『スコット伝』の書評(1838)の中で、歴史家はスコットの歴史小説に学ぶ必要があると説き、その教訓を自らの『フランス革命』(1837)において実践した。ディケンズは小説家として一世代前の流行作家スコットを強く意識していたが、カーライルの思想にもきわめて大きな影響を受けていた。彼はカーライルの著作を繰り返し熟読した後で、フランス革命を舞台にした『二都物語』(1859)を書いたのだった。この小説テクストをカーライルの歴史書のアダプテーションとして考察する。

(2) 現代英国の小説家ヒラリー・マンテルは、やはりフランス革命を舞台にした *A Place of Greater Safety* (1992) というすぐれた作品を発表している。これを『二都物語』と比較することで、歴史小説家としてのディケンズとマンテルの特色を明確にさせる。加えて、マンテルの *Wolf Hall* (2009), *Bring up the Bodies* (2012) の連作はベストセラーとなって近年のイギリスにおける歴史小説ブームに大きな役割を果たしており(Maggie Fergusson, “The ‘Wolf Hall’ Effect”) この二作はロイヤル・シェイクスピア・カンパニーによって舞台化され、現在BBCがテレビドラマを製作中である。この連作は形式的にト

マス・クロムウェルの伝記といってよい小説であり、伝記のアダプテーションを研究するのに格好の素材となるテキストである。このような観点からマンテルのこれら三つの歴史小説を精読する。

(3) ディケンズは偉大な芸術家であるとともに、偉大なエンターテイナーであった。この両方の特質を現代において兼ね備えているのがスティーヴン・スピルバーグである (Joseph McBride, *Steven Spielberg* [2010]: 416)。彼の近作『リンカーン』(2012)はDoris Kearns Goodwin, *Team of Rivals* (2005)のアダプテーションで、基本的に伝記映画である。その眼目は敏腕政治家としてのリンカーンを描くことにある。実は、同じ狙いを見せたのがゴア・ヴィダルの小説『リンカーン』(1984)であった。そして、この小説も優れたテレビ映画(1988)になっている。これらのテキスト、アダプテーションを研究することで、カーライルの言う「偉人の伝記」の今日的な形態・意味を探る。

スコットからカーライルを経てディケンズに至り、ディケンズからマンテル、スピルバーグに到達する線を描定して「歴史とアダプテーション」について考察するという観点は類例を見ないユニークなものである。また、従来の研究はPeter Gay, *Style in History*に典型的に見られるように、歴史記述の詳細については漠とした印象批評に止まっているくらいがある。研究代表者はこれまで一貫して英語テキストの具体的な言語表現を手掛かりに綿密なテキスト分析を心掛けてきており、本研究もその方向で行う。英文学研究において日本人が英米の研究者に負けない成果を生むには結局テキストの精読が一番の近道であるとの信念に基づき、研究代表者はこれまでに国際学会の研究発表を2回、招待講演を3回行い、英米で発行される国際誌に10本を超える論文を掲載し、8冊の共著、編著を英国で出版している。アダプテーションに限っても3本の論文を国際的な場で発表した。今回の研究成果も、後述するように、この分野において学会をリードする海外の専門家のレビューを受け、精度を高めた上で、国際学会や国際的な専門誌において世に問う予定である。そのような形で成果を発信することには、日本の英文学研究の一端を世界に広く知らしめる意義があるだろう。

### 3. 研究の方法

本研究は、基本的に、これまで行ってきた「ディケンズとアダプテーションに関する考察」、「小説から映画へ『アダプテーションの詩学』構築に向けて」に基づくアダプテーション研究を継続するものである。したがって、重要な課題は小説の言語表現と映像表現の関係の考察を深化させることであり、そのために今回のテーマである歴史小説、歴史映画に特化したものだけでなく、広くアダプ

テーション関係についての文献を渉猟し、文学作品をもとにして製作された映画をできるかぎり収集・分析する作業を続ける。スコットとマコーレーに見られる19世紀前半における文学と歴史の関係は3年間にわたって熟考し、それと並行して、毎年以下に挙げる問題意識を持ちながら小説や映画のアダプテーション・テキストの精読を行う。

#### 平成27年度

・ディケンズは1859年8月25日ジョン・フォスター宛ての手紙で『二都物語』について、自分は「絵画的な小説」を構想していると述べ、「真に迫った登場人物を配し、章が進むにつれ物語は興味を増していくのだが、人物たちの性格は会話によってではなく、物語によって明らかにされる」と説明を加えている。この説明をどう解釈するのか、批評家の意見は必ずしも一致していないようであるが、「絵画的」という語を「動く絵」と考えれば、ディケンズは科白がなく俳優のアクションで物語が展開するサイレント映画について語っているようなものである。彼はこの小説の序文において、「カーライルの素晴らしい本の哲学に何を加えることも望めないが、あの時代についての通俗的かつ絵画的な理解の手段にながしかを付け加えることを望む」と語っている。うがった言い方をすれば、ディケンズの『二都物語』はカーライルの『フランス革命』をサイレント映画にしたアダプテーションなのである。アダプターとしてのディケンズは先行テキストの歴史哲学を受け売りして述べたりせず、既に有名だったカーライルの群衆暴力描写のリメイクも避けた。しかも「偉人の伝記」スタイルはとらない。その代わりに、平凡な個人が意図しないのに大事件に巻き込まれていくというスコットの歴史小説のパターンを踏襲している。だがスコットとは異なり、実在の人物と虚構の人物を混ぜることはせず、虚構の人物たちを実際の歴史的状況の中に置くにとどめる。そして、意外にも、(マコーレーがスコットに認めたであろうと想像される)食事、服装、習俗などについてのディテールを書き込むことはしていない。このようにスコット、カーライルとの関係を吟味しながら、『二都物語』の歴史小説としての特性を精査する。

・Avrom Fleishman, *The English Historical Novel* (1971)は、この小説にあっては、個人の救済が社会の救済に直結していると論じるが、Andrew Sanders, *The Victorian Historical Novel* (1979)は、そのような結びつきは強く感じられないと言う。これは非常に重要な問題であるので是非自分なりに結論を出したい。

・アダプテーションとしての『二都物語』に加えて、小説『二都物語』の映画化(アダプテーション)も考察する。David Selznick 製作 Jack Conway 監督の1935年版とRalph Thomas 監督の1958年版を、特に主人公シド

ニー・カートンを演じる Ronald Colman と Dirk Bogarde の演技に関して比較する。  
・スコットの小説 *Old Mortality* のテキスト、  
ならびにスコットの歴史小説論の研究として定評のある Harry E. Shaw, *The Forms of Historical Fiction* (1983); *Narrating Reality* (1999) を精読する。

#### 平成 28 年度

・マンテルの *A Place of Greater Safety* は登場人物の多い、カーライル的なパノラマを展開する。この叙述方法と『二都物語』のそれとの相違をフランス革命に関するさまざまな歴史的記述と比較しつつ検討する。

・チューダー朝宗教学史の権威である Diarmaid MacCulloch は *British Academy Review* (February 2014) 掲載のインタビューで、マンテルの *Wolf Hall* と *Bring up the Bodies* を絶賛している。特にアン・ボーリン失脚の顛末を描いた後者のクライマックスを褒め、「この複雑な出来事に対する説得力のある説明がなされている」と述べる。このクライマックスでは、アン・ボーリンと連座という格好でヘンリー・ノリスら 4 人をトマス・クロムウェルが処刑するのだが、この背後にマンテルはクロムウェルの復讐を想定している。マンテルは第 1 作 *Wolf Hall* でウルジー枢機卿が失墜した後、宮廷で開かれた仮面劇で悪魔に扮したノリス以下の 4 人がウルジーの手足をつかんで地獄に投げ落とす場面を描く。そして、*Bring up the Bodies* の大団円で、ウルジーに恩を受けたクロムウェルがこの 4 人を裁く。彼はウルジーの右手をつかんでいたノリスから始めて右足、左手、左足をつかんでいた者たちを順番に断罪していく。このプロセスはロイヤル・シェイクスピア・カンパニーの舞台上で巧妙に視覚化されていた（舞台手前にクロムウェルを、奥に 4 人を手足の位置に合わせて並べ、断罪されるごとに一人ずつ消えていく）。たしかにドラマティックな展開だが、宮廷の仮面劇はマンテルの創作である。ここまでウェル・メイドに作ってしまったら、嘘くさくなって真実味がなくなるのではないだろうか？ MacCulloch は「説得力のある説明がなされている」と言うが、歴史家としてその点をどう思うか気になって同教授に連絡をとって確認してみたら、「あの本が歴史の本なら気になるが、小説だから全然構わない」という返事だった。このような反応の相違はどういう意味を持つのか？ 読者がどこまで歴史小説に真実性を求めるかは単に個人の趣味の問題なのか？ 歴史学者と積極的なコンタクトを取ることによってその点を吟味したい。

・トマス・クロムウェルはこれまで悪役と決まっていた。トマス・モアを主人公にしたロバート・ボルトの戯曲 *A Man for All Seasons* (1960) は典型的な例である。これは Fred Zinnemann 監督で映画化され(1966) 作品賞、

監督賞を含む 6 つのアカデミー賞を獲得した。アダプテーションのテキストとしてこれらも視野に入れ、マンテルの小説およびその劇化作品と比較する。

・引き続き 19 世紀の史学研究として、マコーレーの *History of England* ならびに John Clive, *Macaulay* (1987) を精読する。

#### 平成 29 年度

・研究代表者は 2014 年 6 月に行われたディケンズ・フェロウシップとマーク・トウェイン協会との合同大会において、ディケンズとトウェインの文学的接点について考察し、ディケンズの顕在的センチメンタリズムとトウェインの潜在的センチメンタリズムを対比させて論じた。スピルバーグは『カラー・パープル』 興味深いことに、彼はアリス・ウォーカーの原作を「ディケンズ的」と形容している(McBride, 368) や『シンドラのリスト』といった「真面目な」映画を作るとセンチメンタリズムに走る傾向がある。それは特に後者のクライマックス、シンドラが「なぜもう一人救えなかったのか？」と言って泣き出す場面などに観察される。ところが『リンカーン』ではそれを抑えている。全体にこの映画は抑制が利きすぎていて、スピルバーグの才能の発露も抑えられてしまった感がある。ディケンズ同様センチメンタリズムはスピルバーグの芸術的資質の中核にあり、これを抑えると作品全体の力強さが損なわれるのではないだろうか。スピルバーグがアダプトしたグッドウィンの著作はリンカーンが鋭く抜く政治家だったということを強調しているのに、結局スピルバーグは従来の理想化されたリンカーン神話を脱し切れなかったのではないか。映画の陰影に富んだ画面（このトーンは 1988 年のテレビ映画と著しく異なる）は「偉大な」大統領の神話性を強調する結果に終わったように思われる。対照的に偶像破壊を意図したヴィダルの小説を読むと、その点が鮮明に浮かび上がってくる。

・ジョン・フォード監督の *Young Mr. Lincoln* (1939) など、できる限り多くのリンカーン映画を精査する。（ただし、27、28 年度の研究に遅れが出た場合にはスピルバーグ作品にのみ研究を集中させる。）

・19 世紀の歴史小説と歴史記述の言語表現の詳細について、スコットの *Old Mortality* とマコーレーの *History of England* から（暫定的な）結論を導き出す。

#### 4. 研究成果

本研究のテーマは「アダプテーションとしての歴史小説ならびに歴史のアダプテーション」であった。このテーマに直接的にかかわる業績として、招待講演の研究発表を行った後、それを活字にして英米の歴史小説（ヒラリー・マンテルの『ウルフ・ホール』とゴ

ア・ヴィダルの『リンカーン』)に関する日本語の論文を発表した。この論文の主眼は歴史小説をどのように評価すべきか、という問いかけであり、これに対する答えとして、実在の人物や事件を題材にした本格的な小説の場合、歴史小説を歴史的な事実のアダプテーションと考えることによって、史実をどのようにアダプトしたか、を検討するのが平凡ながら本道であろうという提案を二つの具体例を通して行った。また、継続的な研究課題であるディケンズに関しては、彼の執筆した歴史小説である『二都物語』について、この作品ならびにこの作品を基にしたアダプテーション(映画)テキストの読みを深化させた。その過程で新しい作品解釈の可能性が見えてきたので、先行研究を検討した上で、近いうちに考えをまとめて研究論文の形で発表したい。また、ディケンズの伝記的事実と作品の関連について、ならびに『大いなる遺産』について国際誌に論文を発表し、『荒涼館』の翻訳(全4冊)を刊行するとともに、国際学会で研究発表を行った(なお、この発表原稿を活字にしたものはすでに国際誌に掲載が決定している)。研究の国際的な発信は当初の大きな目的の一つであり、これらの成果はそれを十分に満たすものである。加えて、連合王国への海外出張を利用して、ディケンズならびにアダプテーションに関して、ロンドン大学のマイケル・スレイター、フィリップ・ホーン両教授から有益なレビューを受けることができた。また、小説から映画へのアダプテーションについてアメリカの学術誌に論文を掲載した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

佐々木徹、「トウエインはアメリカのディケンズか?」、『マーク・トウエイン 研究と批評』、査読無、14号、2015、10-18

佐々木徹、“Back to Owl Creek Bridge: Robert Enrico’s Adaptation Reconsidered”、*Style*、査読有、Vol. 49 No. 2、2015、181-95

佐々木徹、“*Praeterita and Mrs. Dalloway: A Hypothetical Note*”、*Virginia Woolf Miscellany*、査読有、No. 87、2015、39-41

佐々木徹、“Dickens and the Blacking Factory Revisited”、*Essays in Criticism*、査読有、Vol. 65 No. 4、2015、401-20

佐々木徹、「歴史小説は如何に評価すべきか - *Wolf Hall* と *Lincoln* の場合」『アルピオン』査読無、Vol. 63、2017、15-41

佐々木徹、“What Estella Knew: Questions of Secrecy and Knowing in *Great Expectations*” *Dickens Studies Annual* 査読有、Vol. 48、2017、181-190

〔学会発表〕(6件)

佐々木徹、「小説と映画 ピアスの『アウル・クリーク橋』」、日本アメリカ文学会東京支部大会(招待講演)、2015.4.11、慶應義塾大学三田キャンパス

佐々木徹、「小説と映画について」、日本英文学会九州支部大会(招待講演)、2015.10.25、佐賀大学

佐々木徹、「歴史小説について」、日本英文学会東北支部大会(招待講演)、2015.11.7、宮城学院女子大学

佐々木徹、「歴史小説は如何に評価すべきか - *Wolf Hall* と *Lincoln* の場合」、京大英文学会、2016.11.5、京都大学

佐々木徹、“*Esther’s Narrative*”、レスター大学ヴィクトリア朝研究所 50周年記念シンポジウム(招待講演)、2017.11.22、連合王国レスター大学

佐々木徹、「ことば、ことば、ことば ディケンズを読むおもしろさ」早稲田大学英文学会・英語英文学会合同大会(招待講演)、2017.12.2、早稲田大学

〔図書〕(計1件)

佐々木徹、翻訳、岩波文庫、チャールズ・ディケンズ『荒涼館』全4冊、2017年、512、528、496、496

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：

番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐々木 徹 (SASAKI, Toru)  
京都大学・大学院文学研究科・教授  
研究者番号：30170682

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者

(4) 研究協力者

( )